

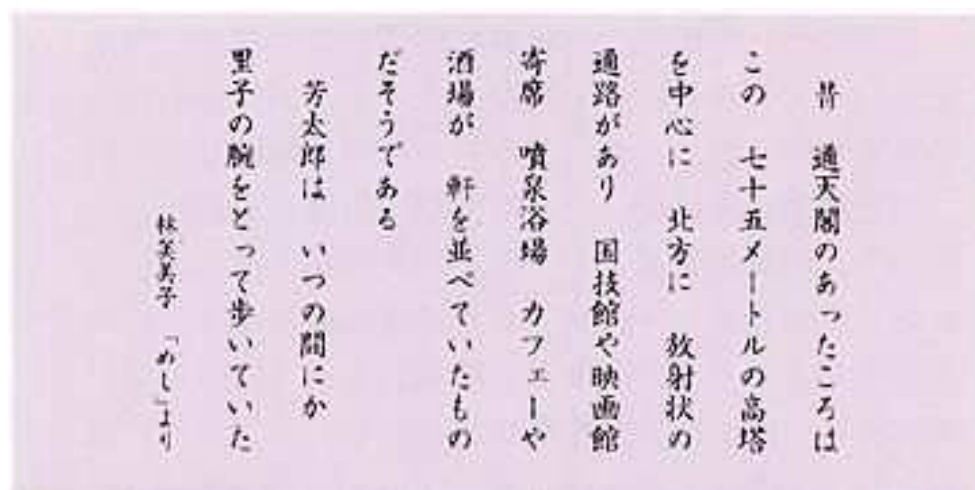
13 林 芙美子文学碑

■場所

天王寺区茶臼山町
市立美術館南側

■交通

地下鉄:天王寺
(5、6号出口)
JR 西日本:天王寺



林 芙美子(1903年～1951年)

林芙美子(本名 林フミ子)は、明治36年(1903年)下関市田中町に生まれ、昭和26年(1951年)6月29日死去した。

長崎市勝山小学校入学後、行商の両親について各地を転々としたため、小学校を十数回も転校したが、尾道市第二尋常小学校(現土堂小学校)を卒業し、尾道市立高等女学校(現尾道東高等学校)にすすんだ。

大正 11 年、高等女学校を卒業して上京、銭湯の下足番、露天商、出版社や株屋の事務員、毛糸店の売子など職業を転々としながら文学に親しんだ。

昭和 3 年、上京してからの苦しい放浪生活を日記風にまとめた「秋が来たんだ」(副題「放浪記」)を『女人芸術』に連載して好評を得、同 5 年「放浪記」として刊行されると、たちまちベストセラーになり、一躍その名を知られるようになった。

昭和 6 年、「風琴と魚の町」「清貧の書」などを発表。昭和 10 年には「牡蠣」を発表し、それまでの回想的、自伝的な、いわば詩的散文から脱皮して、庶民の姿を客観的な手堅い手法で表現するようになった。

昭和 22 年に「うず潮」を、翌 23 年には「晩菊」を発表し、「晩菊」は第 3 回日本女流文学賞をうけた。その後「浮雲」「茶色の眼」等の作品を発表したが、昭和 26 年、「めし」を朝日新聞に連載中急逝した。

「めし」には、大阪市内の描写が随所にあり、とりわけジャンジャン横丁、新世界の風情がうまく描かれている。「放浪記」から「めし」にいたるまで、女の哀しさ、切なさを生涯かけて描きつづけたが、「めし」は、彼女の円熟期の頂点となるべき作品であったといわれている。

墓所は、東京都中野区上高田四丁目の万昌院功運寺。